

「これから働き始めるみなさんへ」

2016年6月

小原美紀

大阪大学大学院国際公共政策研究科

秋田あゆみ ・ 石倉真衣

大阪大学法学部国際公共政策学科 2016年3月卒業生

+

大阪大学小原ゼミ 2014年度・2015年度ゼミ生一同

## はじめに

約2年前、当時私が研究対象としていた「女性労働者」に、「はたらくことの難しさと楽しさ」に関するインタビューを行う機会がありました。インタビューは、私の専門である統計分析を補完するために行ったものでしたが、いろいろな方に話を聞くうちに、分析の証拠というよりも、これから働き始める女子学生に対する貴重なメッセージがたくさん含まれていることに気が付きました。

そこで、当時、学部のゼミ生であった女子学生と一緒に、学生と立場の近い、いわゆる高学歴の社会人女性(おもに大阪大学卒業生)から、働くことに関して学生へのメッセージをもらうというインタビューを企画しました。せっかく学生がからむのだから、教員からのトップダウンではなく、学生が中心となって、自らアポをとり、訪問し、インタビューを行い、文字起こしをする形で進めてきました。

ここ収めた記録は、当時、大阪大学の学生だった二人の女子学生が、そのインタビューで心に残った言葉をまとめたものです。インタビュー自体は、約2年間にわたり多くの方のご協力を得て行ってきました。以下でとりあげたものは、このうちのほんの一部です。学生に、できるだけナマの言葉が伝わるように工夫してくれました。

希望の就職先につけてもつけなくても、楽しい職業生活を送っている先輩たちの言葉は、学生たちに、失敗しても大丈夫だよという勇気を与えてくれると思います。運よく、悪くない就職先につけた場合には、果たさなければならない職務責任が待っています、それも何とかなるよ、と背中を押してくれると思います。この記録が、学生にとって、「働くこと」について考えるきっかけになってくれればうれしいです。

## パートⅠ．就職活動への不安

記録その1．最高の形で就職活動を終えてもよい仕事が出ているとは限らない

就職先は今思うとご縁やったなと思う。

就活がどうというより、入ってから頑張ることのほうが大事。

「苦勞は買ってでもしろ」と言うけどその通りだと思う。

過酷な労働環境で体調を崩し、入社後1年半で転職したAさんから頂いた言葉です。学生時代の就職活動では、「ここで働くんだ！」と憧れを感じた就職先。しかし、1日15時間労働で、絶えずノルマ達成のプレッシャーをかけられる部署に配属されました。転職してやく半年後に当時の就職活動や前の職場のことを振り返っていただきました。

「就活は自分なりに頑張っていって、複数の企業から内定をもらった。でも内定先の多くの企業の人事は、こちらから質問しても受け答えがマニュアル通りだな、という印象。なんかちょっと違う…。『将来自分もこうなるのかな』と考えるとしっくりこなかった。最終的に就職先として選んだ企業の方は、どの人も、会社の中での自分の役割をちゃんと自覚しているのがわかる話し方だった。すごく印象がよかった。だからこそ、その企業を選んだ」。

学業成績も優秀で、社交性もあり、就職活動にも熱心に取り組んだAさん。どこで

働くのが自分にとって最適かを真剣に考え、悩んだ末に選んだ企業だったようです。

「入る前は、普通に働こうと思っていた。過激じゃなかったら、とても楽しいしやりがいもある仕事。忙しさは知っていて、むしろイメージ通りだった。でも、『自分自身はできるだけ』と思っていた。」

ところが、実際に勤めた職場はまったく違いました。過酷なノルマと、長時間労働。結局体はボロボロになり家族の勧めで転職しました。振り返っていただいて出てきた次の言葉に、はっとしました。

「もしかすると、会社に対するイメージというより、自分がついていけないというイメージができていなかったかもしれない」。

彼女の冷静な言葉はさらに続きます。

「今思えば、あの職場で働けてよかった。『自分に限界をつくるな』という精神を1年間で叩き込まれた結果、頑張る癖がついた。『苦勞は買ってでもしろ』とよく言うけど、その通りだと思う。しんどいことを経験すると、後がラク。(今の職場も忙しいけれど)前職を経験したおかげで、そこまでしんどいとは思わない。」

Aさんには、このインタビューの約1年後に、その後の気持ちの変化をもう一度インタビューさせてもらいました。1回目よりもさらに前向きになっているAさんに、働く場所を自ら選んでゆく強さと柔軟さを感じました。

「今は、また転職をしてもいいかなと思っていて。前職は自分で選んだ職場。今の職場は、前の職場を辞めた後のために入った職場(自分で決めた道ではない)。(今の職場は)社会人生活の中でも一番落ち着いている。ここで働くことで、自分の人生を見つめなおすことができたと思う。身体を休めることができたし、次また(自分がしたい仕事のできる職場に)チャレンジしてもいいかなと」。

あんなに過酷な労働環境で健康も害したのに、ふたたび、挑戦してみてもいいかも、次こそうまくやれるかもと、笑って答えるAさんにたくましさを感じました。同時に、転職したことで、労働を継続しながら前の職場環境を客観的に振り返ることができたことも、よい結果に結びついたのではないかと思います。

最後に、就職活動中で、苦しんでいる学生に一言いただきました：

「(就活生の自分に声をかけるとしたら)就活続けろとは言わないかなあ。就活はしんどかったけど、今思えばご縁だった。みんなが動き始めると焦るから(就活を)するけど、今から振り返ると『何にそんなにこだわっていたんだろう・・・』と思う。

就活がどうというより、入ってから頑張ることのほうが大事。それよりも、学生時代にしかできないことが、たくさんある」。

#### インタビュー学生の声 Aさんのインタビューを振り返って

まず印象に残ったのが、「体調を崩して離職」という経験を、挫折と思えないほど前向きに捉えていたことです。転職して半年後と2年後の2回にわたってインタビュ

一に協力していただきましたが、転職先で一生懸命仕事に取り組むことで、働く自信が強くなった印象を受けました。仕事の挫折が、新しい仕事を通じて克服できるということを知りました。

学生時代の就職活動について「就職活動がどうというより、(厳しい環境の中で)頑張れてよかった」と述べている点も、学生として強く心に残りました。失敗しない企業選び！内定を勝ち取るために！と就活生に指南するメディアをたくさん見ますが、「就職先をいかに選ぶか」ではなく「就職先で自分が何をするか」が大事なんだと実感しました。

### 小原より一言

Aさんの「自分ができないというイメージが持てていなかった」という言葉は、実は、望まざる離職を経験した高学歴女性から、よく聞かれる言葉です。「我慢強さだけは私の取り柄だと思っていた」「私が続けられないとは思ってもいなかった」、そして、「そんな自分が許せなかった」「何とかしようともがけばもがくほど体がついていけなくなった」。Aさんの場合、家族がそれに気が付き、転職をすることで再び自信をとりもどしています。家族でなくてもよいと思います。職場外の人が優秀な女性の働く意欲を支えられたらいいなと思います。そして、女性自身も、最適な計画を立てたとしてもうまくいかないことはあることや、ペースを落としてでも職場を変えてでも働き続けることで過去の経験が活かされることを知っておくと、ラクかもしれません。

## 記録その2. 納得のいく就職先でなくてもいい

今になって思えば、最初から希望の企業に入る必要はない。  
とりあえず、働いてみたらいい。

このメッセージをくださった B さんは、いわゆる「就職氷河期」に就職活動を経験しました。その結果、ESを100枚ほど提出したにも関わらず、内定が出たのは中小企業1社のみでした。当時の心境を B さんはこう振り返っています。

「研修の時点で辞める人が出るほど、厳しい社風だった。就職先に納得はしていなかったけれど、ほかの企業の内定はなかったので仕方なく入社することに。」

就職する前からとにかく不安でたまらなかった B さん。同級生の中には内定をもらえなかった者も多く、就職浪人する学生も多かった世代。そんな友達を横目に、B さんは、最初から過酷だと予想がついていた職場に飛び込むことを選択します。

「もともと転職を視野に入れた就職だった。労働環境は、想像どおり劣悪だった。朝7時から夜24時まで働かされ、締切り前は50日連勤で2日に1回徹夜することも普通で…。

でも、今の自分が他の仕事を見つけられるのか、他の企業に必要とされるのか。そう考えると、自分に実力がつくまでは怖くてやめられないと思った。」

何人もの同期生が辞職してゆくなか、彼女は「辞めてどうなる？」という怖さから、気

持ちを変えていきます。

「むしろ『やってやろうじゃん』って。やっている仕事自体は好きだから、苦痛ではなかった。そのうちに、ギリギリのところ、必死で取り組んだ仕事をお客さんが認めてくれ、『もっと大きな案件を任せたい』と言ってくれた。」

Bさんは仕事に一生懸命取り組む過程で実力をつけ、顧客からの信頼を得ます。結局、この会社で5年間勤務した後、同業の外資系企業へ転職しました。

学生時代のBさんからは、就職先に満足している様子は伺えませんでした。しかし、今では「あの会社で働けて良かった」とおっしゃるほど、過酷な労働環境下で働くことで自信つけ、ステップアップに成功しています。ここからわかったことは、就職活動の過程や結果が、その後の社会人生活まで決めてしまうわけではないということです。

### インタビュー学生の声 Bさんのインタビューを振り返って

Bさんはとてもはきはきとした女性で、負けず嫌いで努力家な印象をもちました。苦しい状況も「いつか自分のためになる」と捉えて楽しめる、抜群の吸収力の持ち主でした。Bさんからは、就職活動の結果に納得がいかなかったとしても、まずは与えられた環境に飛び込んで働いてみることで道を切り開けると教えていただきました。

就職活動を控えた学生の私は、試練を乗り越える度に強くなられてゆくBさんのお話にとっても感動しました。「最初から希望の企業に入る必要はない」という言葉は、就活生の多くが心に留めておくべき言葉だと感じます。もしも理想が叶わなくとも、目の前

の仕事に全力で取り組み、自分なりの働き方を見つけていきたいと思いました。

### 小原より一言

まわりがどんどん仕事を辞めていくなか生き残ったBさんを、「強い人だから」とか「努力家だから」という言葉で説明してしまうのは違和感があります。実は、私は彼女を学生のときから知っていて、最初の企業に働き始めてから半年後の深夜に、彼女から、「将来が漠然と不安で仕方がない」というメールをもらっています。決して強い人ではないし、ごく普通の学生の一人でした。怖さをエネルギーに変えられたのは、むしろ、あまり先のことを考えないという彼女の性格や、考えられないという状況にあったように思います。まわりに女性がいなければモデルもないし、将来プランもたてられません。そんなときには、むしろ、このプロジェクトが終わったら辞めようというぐらいの気持ちで、目の前のことを一つ一つこなしていくとよいのかもしれません。気が付いたら少し視界が広がるころまで繋がっていた、という彼女の振り返りが印象に残りました。

### 記録その3. 就職活動の期間が他の人より長くても

就職浪人を終えて働き始めたが、いろんな経歴の人がいるから関係ないと感じる。

今になって思えば、無理やり急いで決める必要もなかった。

むしろ、就活は、学生としていろんな企業の人と話せる最後の機会だから、難しく考えずにもう少しがんばってみてもよかった。

Cさんは、公務員として働き始めて2年目の女性です。インタビューには、就職して半年後と、その1年後に2回ご協力していただきました。2回目のインタビューでお会いしたCさんは、以前よりも数段いきいきと仕事についてお話をしてくださりました。

「(仕事に)去年よりは慣れて、楽しくなってきた。仕事の幅も広く、毎日ずっと新しい。海外から急に問い合わせや訪問があったり、プレスリリースに携わったり。上司は優しい。怒るというより、注意される。すごくチェックされてるなあ…。また、前回話した『東京に行きたい』という目標は、今でも持っている。」

とても楽しく働いていらっしゃるCさんですが、今回取材させていただいた方々の中で唯一、就職浪人を経験されました。

「現役のときは、民間を受けては落ちまくっていた。とはいっても、大した数は受けてなかったかも…業界も、絞っていなかった。民間を受けていた時に、『もっと人間らしいことができないかな』と感じていた。ある程度の残業で帰れて、休みもあって、ずっと続けられる仕事ないかな…と。もともと民間ですっとやっていける自信がなかったので、

公務員も視野に入れていた。民間企業を経験して、いつかは公務員…というビジョンを持っていたけれど、適性を考えて次の年から公務員を目指すことにした。」

希望の勤務先に内定をもらえなかったときや、内定した後にやはり納得できないと感じたときに、就職浪人をした方が良いのか、それとも、とりあえず働いた方がよいのか、直接聞いてみました。

「サークルには、留年して就職活動をする人も、卒業して就職活動をする人もいた。どっちがいいかは、みんな迷うところではあったかな。私は学費がもったいないから卒業！（笑）

今思えば、急いで仕事を決める必要はない。（留年した子も、卒業した子も）みんないい仕事を見つけているよ！」

その上で、就職浪人の不安や、それを支えてくれた周りの存在も明かしてくれました。

「私が就職活動をした年は、政権の影響で公務員の募集数が減り、公務員も浪人生が多かった。自分と同じように就職を遅らせる友達も多かったので、心の支えがあった。

（もし同じ境遇の友達がいなければ…）苦しくなって、1年目で適当なところに就職を決めようとしたかもしれない。」

就活中はなかなか内定が出ないことに焦っていた様子でしたが、働き始めた現在は「いろんな経歴の人がいるから(就職浪人をしても)関係ない」と話しているCさん。

社会人となった今、「むしろ、学生としていろんな企業の人と話せる最後の機会だった。あんまりよく考えすぎずに、もう少し頑張ってみてもよかったかも」と、2年間の就職活動を違う視点から振り返っていました。

### インタビュー学生の声 Cさんのインタビューを振り返って

Cさんには就職半年後と1年半後の2回インタビューさせていただきましたが、1回目と比べて2回目には、仕事が充実してきた印象を受けました。ご本人も「慣れてきたかな」とおっしゃるように、仕事や周囲の人に対する印象も深まっている様子が伺えました。また、就職活動についても、より冷静に振り返ってくださりました。1回目はあまりお聞きできなかった苦労も少し感じましたが、何より現在のお仕事を心から楽しんでいらっしゃる様子が印象的でした。

Cさんのお話をお聞きすると、就職活動は「内定が出る早さ」ではなく、「いかに自分に合った仕事を見極められるか」どうか重要ですと感じます。私自身も就職活動を「学生としていろんな企業の人と話せる最後の機会」と捉え、焦らず自分と向き合いたいと思いました。

### 小原より一言

Cさんは就職浪人をして成功したケースですが、就職浪人をしてうまくいかなかったケースもあります。これまでに私がインタビューしてきた中には、就職浪人をして希望の職業につけず、いまだにあきらめられずに悶々とした生活を送っているという人もいました。Cさんが言うように、就職浪人をして働くことはできるし、就職浪人によって仕事の出来が変わるわけではなく、その時間をどう過ごし、その価値をどう考えるかで結果が変わるように思います。

## パートⅡ. 実際に働き続けることへの不安

就活はとりあえずうまくいったけれど、きちんと働けるか自信がない人へは、次のメッセージが心に響くのではないのでしょうか。

記録その4. やれるはずないと思ったけれど・・・やれました。

就活では、とにかく社風を重視していた。

働いてみると業種より環境が大事だと感じるし、文系は特に業界は違っても仕事はそんなに変わらないと感じる。

仕事は難しくて頭を使うが、憧れの先輩もいる環境での仕事は楽しい。

会社の社風から「この会社に働く姿が想像できた」と自分に合う会社が見つかったと感じる D さんの言葉です。入社後は、希望とは異なる専門的な部署に配属されます。ところが、仕事をこなすうちに仕事のやりがいや楽しさを見出していました。

「もともとは営業(志望)と言っていた。最終面接時に『法務部配属』と言われて。法律は好きじゃないし勉強もしていないけど『法学部だから大丈夫でしょ』と言われた」。

働き始めてすぐに、できるはずがないと思う仕事を任されたといいます。

「配属後にいきなり大きなプロジェクトを任された。英語と専門知識が必要でわからないことばかりなのに、直属の先輩がおとなしくて頼りない。絶対に無理だと思った。」

ここで、彼女がとった行動は以下の通りです。

「どうすべきか迷ったとき、職場の他の上司に自分から『しんどい』と相談することで、周囲の協力を得て成功できた。やっていることに興味はあるから嫌ではない。だから、無理はしていないけれど、自分にできることは一生懸命頑張った。大変だったけど、自己成長を感じて嬉しかった。」

最初に話を伺ったとき、とても責任があり難しい仕事を平然とこなしていることに驚きました。ただし、彼女は、仕事の難しさは、職場環境の良さで何とかなると学んだようです。

「業種より環境が大事だなと、働き始めてから感じる。法務の仕事は難しくて頭を使うが、憧れの先輩もいるしルーティンワークよりも飽きなくて楽しい。これからも続けていきたい」。

#### インタビュー学生の声 Dさんのインタビューを振り返って

Dさんからは、派手なタイプではなくとも芯の強さを感じました。自分の想像と異なる環境に直面しても、前向きに一生懸命取り組むことで仕事のやりがいを掴んでいらっ

しゃる様子が印象的でした。本人は周囲の協力や環境のおかげとおっしゃっていましたが、それ以上に D さんの仕事への取り組みが今の充実につながっているのだろうなど感じました。

また、「社風で会社を選んだ」、「(うまくいく秘訣は)流れに身を任せて」とおっしゃっていたのも心に残りました。学生時代から強いキャリアビジョンを持っているようには見受けられましたが、仕事を実際にやってみて仕事の楽しさや目標を見つけていらっしゃるところが伺えました。

### 小原より一言

いくつかの統計でも明らかにされているように、社風は、女性が勤務先に対して不安を抱く最大のポイントであり、社風が予想と異なることで離職確率は大きく上昇します。D さんのように社風や職場環境が予想通り良ければ、どんな大変な仕事であっても続けられるのかもしれませんが。

一つ追記したいのは、D さんは学生のころから、接客業のアルバイトをし(すなわち、塾の講師といったお客さんが先生といって慕ってくれるような仕事ではなく、お客さんに頭を下げる必要のある仕事)を積極的に行い、職場環境の大切さや雇用者に対する態度を学んでいたと言っていました。偶然、良い社風のところに勤めたのではなく、若いころから社風についてとことん考えていたのだと思います。そのような意味で、就活よりも前の、すなわち学生時代の過ごし方は重要だと感じます。

働けるところまで働いてみようというやる気に満ちた人もいます。おそらくそんな人でも不安はあるでしょう。働きたい、でも、周りはたぶん理解してくれないだろうな、突っ走って大丈夫かな…こんな人には次のメッセージを送ります。

#### 記録その5. 自分の理想が描けたら、それを目指さない理由はない

こういう自分が好きだなという自分像を目指せばよい。

仕事やプライベートの配分は人に決められるものではない。自分の中でちょうどいいものを探してほしい。

両親に反対されながらも体力仕事である職業を選んだEさんの言葉です。体力的な問題や女性の働きやすさなど、仕事の大変さを踏まえながらも、仕事の楽しさをイキキと語っていただきました。

「想像していたけど、想像以上に地味で変な肉体労働が多い。」

それをどうやって乗り越えてきたのか、と尋ねると以下の回答を得ました。

「仕事が好き。ピリピリした緊張感があればあるほど頑張れる。絶対やらなきゃいけないというプレッシャーというか、ランナーズハイみたいなものがある(笑)」

家庭を持ちたい女性にはなかなか厳しい職場のようで、ロールモデルとなる女性もほとんどいないようです。

「結婚して続けられない職業モデル。転勤も多いし。子育てしながら働いている人は2人知っているが、全然会うことがないので想像できない。モデルがない。

でも結婚しても仕事を続けたい。最近先輩からアドバイスされたのは、キャリアの前倒し。つまり、人よりも早く出世して、戻ってこられる道を確認しておくしかない。辞めていく女性は、仕事は好きだけど悩みながら辞めていく。男の人は長期的なキャリアビジョンを描きやすいが、女性は早く活躍して有無を言わさずエースになって会社に認めてもらえない。抜けたら困ると思わせることが大事。『なんで女性だけ？』とは思いますが、現実的には活躍しまくるしかない(と覚悟を決めている)」。

とても頼もしい労働価値観です。就職活動を行う学生へのコメントを求めると、以下の回答が返ってきました。

「こういう自分が好きだなという自分像を目指してほしい。『仕事打ち込んだほうがいい』っていう人もいるだろうけど、その人にとってそれが幸せとは限らない。偉くなったからといって幸せとも限らない。仕事やプライベートの配分は人に決められるものではない。自分の中でちょうどいいものを探してほしい。自分は仕事が好きだから仕事中心の生活をしている。呼び出し電話が来たらテンションあがる」。

## インタビュー学生の声 Eさんのインタビューを振り返って

Eさんは、仕事の大変さや周りの環境を乗り越えるというより、それらを受け入れて消化し、自分のものにできる方だなと思いました。普通の人なら「無理かも」と思ってしまふようなことに対しても、前向きに「そういうものなのか」と割り切って取り組める柔軟さのある方でした。

2年間を通して多くの方にインタビューさせていただきましたが、仕事の選び方や仕事に対する考え方はそれぞれ少しずつ異なっていました。それでも、それぞれの方が仕事でやりがいや楽しさを感じているのを見て、Eさんの言うような「好きな自分像」というのを、仕事を通じて見つけているからなのかなと感じました。

## 小原より一言

私自身も、自分のまわりにほとんど女性がない環境で研究者になりました。彼女と共通していたと思うのは、「いまの仕事が楽しい」という気持ちがあったことです。そして、仕事が楽しいかどうかは、必ずしも仕事を始める前からわかっていたものではなかったと思います。なんとなく飛び込んでみて、意外に面白いと気が付いて…今一番楽しいと思うことが仕事であれば、一般的な世の中の女性の考え方や、家族を含めた周りの人の仕事に対する考え方は気にしなくてよいと思います。

ただ、疲れて休みたいときもあると思います。そんなときには、企業外の他の人に頼ってください。自分から助けると発信することができるのも、柔軟に仕事をこなせる人の能力だと思います。

最初の職が合わなくて、次の職も合わなくて…転職を繰り返しながら働き続けることの価値は、Fさんが教えてくれました。

## 記録その6. 学生の頃から「働くことが大切」という価値観を持つことが生きる

いろいろあって転職を繰り返してきましたが、転職のたびに、これまでの経歴が活かされていると感じます。

大学卒業後、2回の転職を経て公務員という道を選択したFさん。学生のころから「働くことが大切」という価値観を持っており、アルバイトに精を出し、就職を意識した大学生活を送り、就職活動を熱心に行い、就職した企業ではほぼ休みなく働いていたそうです。そんなFさんが、なぜ転職することになったのかを尋ねてみました。

「勤務先でのあまりの激務に、入社して半年も経たないうちに転職を考え始めました。契機となったのは、リーマンショックで、勤めていた会社の株が大暴落し、雇用不安から転職しなければという危機感を持つようになりました。」

危機感から1つ目の職を辞め、そのあと勤めた2つ目の職場。ところが、異常な忙しさと疲労などから再び離職を決意。3つ目の職場として公務員を選びます。

「2つ目の職場では初めは営業に、そのあと、人事の職に就いたため、結果的に1

つ目の仕事が活かされる形となりました。さらに、そのあと再離職をし公務員となりましたが、現在の仕事でもまた、労働問題を扱う部署に配属され、これまでの経歴が活かされていると感じます。」

自ら離職し、さらに良い仕事を求めて「前向きな転職」をしてきたFさんです。転職のたびに前の勤務先の仕事が活かされたという言葉は、働き続けたいと思う女性の背中を押してくれるのではないのでしょうか。

#### インタビュー学生の声 Fさんのインタビューを振り返って

Fさんが「働くことが大切」と思って、学生時代にアルバイトに余念がなかったという話が、今の私にそのままぴったり当てはまったのでびっくりしました。でも、アルバイトだけでなく遊びも含めて自分のことを考える時間を持つべきだったというのを聞いて、もっと自分の将来について真剣に考えなきゃいけないなあと思うと同時に、Fさんみたいに突っ走れるキャリアウーマンは素敵だなあと尊敬しました。

#### 小原より一言

会社のために死ぬほど働いても離職するかもしれないし、景気が悪くなれば離職せざるを得ないかもしれない、体調が悪くなれば辞めざるを得ない。離職するかどうかは、個人には予想がつかないことです。Fさんの話を聞きながら、離職しないで済むかどうかではなくて、働き続けられるかどうかを考える方がずっと意味があるように思いました。そして、Fさんが転職のたびに過去の経験を活かし、よりよい職業生活を送って来られたのは、学生の頃から働くことを真剣に考えてきたからではないかな、と感じました。

私に合う仕事なんてないと思う、私の価値なんて誰もわかってくれないと思う。

そんな人に、最後のメッセージを届けます。

長く勤めていれば、職場における自分の立場や、仕事に対する自分の考え方が変わる瞬間があるようです。

### 記録その7. 働き続けていれば、私も、私のまわりも変わる

10年目から抵抗力がつく、20年目から反撃できるようになる。

Gさんは、学卒後から同じ勤務先で働き続けてきました。今回インタビューさせていただいた中では、同一企業での勤続年数が最も長かった方です。そんなGさんに、これまで働いてきた中で、職場で感じる自分の立場の変化を尋ねました。

「大きく変わったのは10年目ぐらいと20年目ぐらい。10年目から人からいろいろと言われることに対して抵抗力がつくようになる、そして、20年目ぐらいからそれに対して反撃もできるようになる」

いまのGさんからは想像ができないのですが、若い頃は、人から批判されるのがとても嫌だったといいます。若いころは、なぜ皆は自分をわかってくれないのだろうと思っていたそうです。そんなGさんから出てきた「10年たてば大丈夫」という言葉はとても力強

く、働く希望を与えてくれます。反撃できる 20 年目がやってくるかどうかはわかりませんが、自分にもその可能性があるとするれば、楽しみではないでしょうか。

「若いころにやっておけばよかったことは「留学」。理由は、もう今からはできない選択で、留学していればもっと広い世界が見えるようになっていたのではないかと思うから」

当たり前ですが、働き始めたらできないことがあります。大学生活も忙しいですが、今しかやれないことを「強制的に考え」て「行動する」ことは重要かもしれません。

#### インタビュー学生の声 Hさんのインタビューを振り返って

仕事をしんどいと感じないためには協力者と評価されることが必要だというお話が一番記憶に残りました。Gさんは自力で動かせるものと動かせないものを把握しており、またその両者をとても上手に利用されておられるのだと思います。自分も社会人になったらそうなりたいと思いました。

#### 小原より一言

職業生活を続けていると、Gさんのように仕事に対する価値観や自分に対する価値観が変わるという楽しみを味わえるのでしょね。私も今後が楽しみになってきました。

おわりに

「わたし本当にちゃんと働けるでしょうか？」

「そのまえに、就職活動やれるんでしょうか？」

ゼミの後、そんなことを話す3、4年生の学生たち。就職活動が始まると、ちょっと将来考えなくちゃと感じ始めるものの、自分が働くイメージさえわからない状態。よく聞く就職活動体験談や労働体験談は本当なのか、それが自分にも当てはまるのかわからない。ネット上にはたくさんの情報があるけれど、たくさんあるからこそ、どれを信じてよいかかわからない。そんな学生たちに、二人の女子学生たちが、2014年から2年間をかけて行ってきたインタビュー記録は、貴重な情報を与えてくれました。

実は、彼女たちのインタビュー記録は、この冊子を作るためではなく、彼女たちの研究(「就職活動と就職後の職業生活」に関する研究)のために使われたものです。研究を始めた頃の疑問は、「どんな就職活動をすればよい働き方に結びつくのか？」でした。そして、彼女たちが出した結果は、「よい働き方を保証するような就職活動などない」というものでした。もう少し言葉を足すならば、「就職活動で自分を知り、自分を磨くことはとても大切なことであるけれど、よい就職先から内定をもらえればよい働き方が保証されるわけではない」ということでした。

このことは、「頑張って就職活動をする必要はない」と言っているわけではありません。学部2年生から卒業までの3年間、ゼミ生とかかわっていると、就職活動を終えて大きく成長する学生がいることに気がきます。追い込まれた状況で、初めて真剣に、自分の適性や適職を探す機会を得た学生が、自らを成長させていくのだと思います。一方で、「就職活動に成功した」「失敗した」という事実だけで自信過剰になったり、自信を無くしたりする学生もたくさん見てきました。今回のインタビューの結果は、

「就職活動の失敗や成功なんかで、その後の職業生活は決まらない」という学生への戒めと希望の両方を教えてくれていると思います。

これは男女を問わず当てはまることです。ただし、今回のインタビュー対象者が女性であり、また、インタビューを行った学生も女子学生であったため、ここに載せた記録は、女性の心により響く結果となっているかもしれません。よく考えれば、高学歴女性は「弱者」になりやすく、政策や制度の対象から外されやすいです。加えて、彼女たちは社会からも弱者とは見られにくいものです。働けば働くほど、社会が言う「普通」の女性から離れてゆきます。一方で、勤務先では「女性は感情的になるからダメだ」などと言われてしまいます。男性だけでなく、働くことに重きをおかない女性からも疎まれ、しまいには親や親族から、「そんなに働いたらイ人と結婚できないよ」と言われてしまう。

女子学生から、「わたし、働けますか？結婚できますか？」と聞かれるたびに、「そうだねえ、できるかどうかわからないから、まず強くなるところか」と笑って答えます。そして、インタビューで聞いた体験談を話して聞かせます。すると、多くの学生が笑顔になります。ここに収めたインタビュー記録が、女性同士を支えるものになったらいいなと思います。

秋田さん、石倉さん、2年間ありがとうございました。二人の就活が一段落した時に、「インタビューをしていたから就活は怖くなかった」と話してくれたこと、卒業の時に、「仕事何とかありますよね」と言ってくれたことが何よりの収穫です。

最後になりますが、インタビューに答えてくれた皆さま、ありがとうございました。頑張って働く姿は、学生たちだけでなく、私の心にも強く残りました。お忙しいなかご協力いただき、誠にありがとうございました。